
ミッシング・リンク 4

柊 麻容

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミッシング・リンク 4

【Nコード】

N3414D

【作者名】

密 麻容

【あらすじ】

役者は揃った。ミッシング・リンクは繋がった。最後に彼らが望んだのは

「もうすぐ空が無くなるよ」

「神が眠りにつくから」

夢だと思える瞬間が欲しくて、何時だって迷ってた。望んだのはあの人。叶えるのは僕。あの人が見たことだと、そう思えば救われると思ってた。しかし真実は違って、みんな賛成したことだったのに。単調な世の中はいらぬ、そう思っていたのに。唯一の誤算は彼らに出会ったことだ。従者が、そしてあの人までが彼らに影響された。偶然と呼ぶには重すぎる。そう、彼らが司の長だということもあるのだからこれは、運命。

望んだのは僕ら。叶えるのは僕。僕にはプログラムを止めることなどできない。

十夜は走り続けていた。

汗で髪が肌に張り付き、息も切れてきていた。

まるで『走れメロス』のようだ、と十夜は思った。内容もそれほど違ってはいないような気がする。ただ、はっきり違うのは風景だった。

人工的な白い壁がどこまでも続いている廊下を走って何分になるだろう。入ってから続いている一本道。ただただ、白い壁だけが視界を占める。

染み一つない白。境界線さえわからなくなるような白さに嫌気がさしながらも十夜は走った。どんなに辛くとも、走ることに意味がある限り、走り続ける。葵が消えた時、はっきりとこの場所が頭に浮かんだ。十夜にはこの場所で合っている、という自信があった。

この風景を伝えたのは葵、そして今、葵は後悔していて望んでいないことを実行されようとしていることまでわかっていた。その理由をまだ十夜は知らない。

突然、目の前に壁が現れた。周りと同じ色で同化してしまっているが確かに前方を塞いでいた。硬質の壁に見える。

十夜は迷うことなく壁に向かって歩き出した。

決まっている道を進むように、確かな足取りだった。道は続いているのだから、進むしかない。葵ともう一人の気配を壁越しに感じた。他にも周りに何人かいるが、知っているモノではなかった。

「葵！」

思わず十夜は叫んだ。

壁を通り抜けた先にあったのはコードだった。視界は赤、青、緑など様々な色、太さのコードに埋め尽くされていた。

それを掻き分けて進んだ先に、少し開けた空間があった。十畳ほどの広さで、機械類の集合体と言えるようなコンピュータが真ん中に設置されている。周りはやはりコードで埋め尽くされていた。

その中に埋もれていたのは葵だった。

「間に合ったみたいだね。いや、少し遅かったかもしれない」

葵の前に立ち、微笑を浮かべているのは以前葵を攫って行った少年、浅葱だった。

「もう歯車はそろったんだよ」

意味有り気に視線を葵の横に向けた浅葱を見て、十夜も視線を動かした。そして、思わず息を飲んだ。

そこに居たのは葵と同じように埋もれている、葵と同じ顔の少年二人だった。

「同じ顔・・・歯車って一体・・・」

「彼らは歯車なんだ。葵は世界を動かしている神でね。他の二人は歯車だよ。神を、世界を動かす為のね」

浅葱はにつこりと楽しそうに笑いながらコードを手に絡ませた。前に会った時の表情とは正反対の喜び溢れる浅葱の顔。それは何か

の役を演じているようだった。伝わる雰囲気は変わっていない、表面だけの演技で。浅葱はまだ迷っている。

「蚩！」

「夜宵！」

十夜の後ろに現れた少年二人は同時に叫んだ。目は葵の横にいる少年に向けられていた。視線を追ってみるとどちらが蚩で夜宵かが十夜にはわかった。無意識の内に高まっていく感覚。人の思考が流れ込んでくるのを十夜は止められなかった。

振り返った十夜は二人を見て、少し安心した。心配している海里、冥里の気持ちが十夜と同調する。コードに埋もれている二人を迎えに来たのだと、今ならわかる。

「君達も来たんだ？ 海里、冥里。・・・もう遅いよ。神はもう眠りに就いてしまった。従者も同時に眠りに就いた。パートナーが長であつてもプログラムには関係ないんだよ」

残酷に、冷淡に笑う浅葱を一瞥し、十夜達は葵のいる方へと走って行った。今は浅葱を救えない。十夜には優先順位はもう決まっていた。みんなを助きたいのなら、神の本当の気持ちを伝えなければならぬ。神、葵はこの結末を望んではいないことを。

コードに埋もれる、というより溶け込んでしまっているようだった。ゲル状になった皮膚に入り込むコード。点滴とは違い、どこから皮膚なのかわからない。少しずつ、侵食していく人工物。すべてが異常だった。

「葵は神なんだ。君達とは違う」

浅葱は絡まったコードを引っ張り、助け出そうとする十夜達を見て冷笑した。浅葱の、コードを弄ぶ姿はまるで操り人形の糸を操っているかのように見える。道化師。操られているのは葵達なのか。それとも浅葱なのか。

手を動かすのを止めずに十夜はきっぱりと強く言い切った。

「肩書きなんてどうだっていい。そんなもの関係なく葵を選んだんだ。始まりなんてそんなものだから。本質を知るのなんてそれから

だ」

「どんなに似ていようが螢だけは見つけられる。本質は個々で違っている」

「必要なんだ。齒車なんかじゃなくてね」

海里、冥里も手を動かしながら続いて言った。表情は優しく、視線は目の前で眠っている従者に向けていた。怒りは今必要ない。望むのは目覚め。絡まり合うコードは自然と解けていった。

コードに溶け込む葵は言葉に反応して少し動いた。それを見逃すはずもなく、十夜は最後に伝えるべき言葉を発した。それは決定的な戒めを解く言葉だった。

「早く帰っておいでよ。世界なんて滅びたつていい。だけど君がソレを望んでいるとは思えない。君はどうしたい？」

右腕で葵の体を支える十夜。コードはまだ葵を掴んで離さない。まだ、意思が弱すぎる。

葵はゆっくりと右手を上げ、十夜の服を掴んだ。

「まだ・・・まだ起きていたい」

「そんな・・・！ 神よ、世界はもう滅びるべきなんだ！」

弱々しく発した言葉に重なるように浅葱は叫んだ。否定の声。浅葱はコードを引きちぎり、葵の方へ歩いていった。葵は一瞬痛さでうめいたが、すぐに自分からコードを引っ張った。拘束はもう解けていた。

浅葱の今までの余裕の持った表情は消え、困惑した顔で葵の前へ立った。怒りを押し殺しているようで、手が震えていた。

「何故・・・！」

「今だけでいいんだよ。生きている価値がある、今だけは壊せない」
薄く目を開け、優しく微笑む葵に浅葱は脱力し、その場に座り込んだ。もう演技はいらない。神がそれを選んだ。

でも、まだ何も終わらない。

葵はゆっくり息を吸い、弱い呼吸と共に囁いた。

「螢、夜宵、起きて」

葵が言ったと同時にコードは蛭達から離れた。白い肌は浮き上がり、本来の姿に戻った。人形は今、人間へと覚醒した。目がゆつくりと開く。呼吸の音が微かに聞こえた。

葵はそれを確認し、十夜に支えられていた体を起こして浅葱の前に座った。視線を合かし、ゆつくりと笑みを作った。葵が得意とする笑顔だった。それは、この選択が間違っではないことを示していた。

「君を待っている人がいるよ、浅葱」

「作動プログラムは停止した」

奥の方から聞こえた声に、浅葱は体を強張らせた。その声は聞き慣れた、耳に馴染んだ声だったからだ。そして彼はプログラムに係ないと思っていたからだだった。

絡まり合うコードを掻き分けて現れたのは浅葱の想像通りの人だった。

「御影・・・」

座り込んだまま、浅葱は御影を驚いた表情で見上げ呟いた。浅葱はまさか身近に関係者がいるとは思わなかった。可能性としては睦月を予想していた。双子なのだから使命も同じだと。しかし、睦月は死んだ。それは可能性を否定するのに十分だった。プログラム関係者はある年齢まで死なない。

御影は右手に持つカードを軽く上げて、優しく笑った。

「もう終わったんだ。これは神が望んだことなのだから」

「でも睦月が・・・」

「会わせてあげようか？」

後ろから十夜に支えられてふらつきながらも葵は立ち上がる。そして軽い、流れるような声で言った。昔、遠い昔に聞いたことがある声。その場にいた全員は同じことを思っていた。

本能で知っているのは葵が神だから、と。

太陽が地平線に浮かび
今消えようとしている
一番星が小さく淡く輝いている
夜を避けるように飛び立つ鳥達
一緒にいれば夜の暗さに心は和むから
美しく咲く始まりの花
儚げに散る残り火
でも夢は叶うから
夢を見よう

さながら空気のように思えた。

「ジンクス・・・」

「神が創った言葉だよ」

上から降ってきた声に浅葱は顔を上げた。そこにいたのは浅葱に似た少年、睦月だった。

地面から一メートルほど浮いた所で止まっている睦月は夜宵、蛭、葵と順に見、最後に浅葱を見た。

「使徒は一人なんだよ。従者は二人で賢者も二人」

「睦月は使徒じゃなく賢者だった・・・？」

「そう。だから僕はここにいる。賢者は世界の安定を」

「そして神の意志のプログラム作成を」

睦月に続いて御影が浅葱を見て言った。

「従者は星を見て管理を」

蛭は自分の力でゆっくりと立ち上がり、葵の方へと歩み寄った。

「使徒は全てを見守り最後まで神を護り続ける」

夜宵も立ち上がり、葵に近寄る。

じっと見ていた十夜は葵の横に立ち、従者達五人を見て言った。

「じゃあ神は・・・？」

「神は絶対的なモノとして全ての統制を」

御影は言い切った後、カードを十夜に向かって投げた。

受け取った十夜は葵を見たが、葵はただ優しく笑うだけだった。

もう必要がなくなったプログラム。十夜にはそれは禍禍しいものではなく、神聖なモノに見えた。それは、ずっと昔に彼らが望んだモノだった。

「神は・・・僕を見放したのだと思ってた・・・」

「睦月が死んだから？ でもジンクスを残してくれた」

御影は葵に苦笑した。御影もジンクスを創ったのが葵だとは知らなかった。だからジンクスが起こす奇跡を知らなかった。覚醒したのは浅葱より遅かったが、覚醒と同時に全てがわかった。睦月は生きている。賢者としての本能でわかった。

睦月が死んだ時、世界に取り残された気がした。

しかし、御影が浅葱と違っていたのは気付いた事だった。睦月がこの世にいなくなった意味を。

「神が・・・望むモノは？」

浅葱は少し震えながらも葵に手を伸ばした。答えを知りたいが、知った後で後悔するのは嫌だった。もう傷つくのはたくさんだった。葵はその手を取り、最後の一節を紡いだ。

「今が今であることを」

従者二人は葵の横に挟むように立ち、笑った。

「だねっ。今だけでいい」

「望むモノはそれだけだから」

蛭、夜宵は前に立つ睦月、御影に向かって右手に拳を作って突き出した。睦月は微笑んで、御影は苦笑してそれに答えた。

拳が軽く重なった。

「さっ僕は帰ろうかな」

「何処へ？」

浮かび上がった睦月を見上げ、浅葱は尋ねた。御影はもう全てを理解していて、ただ見ているだけだった。今ならわかる睦月の状態と場所。浅葱は先程の衝撃でまだ感覚が鈍っていた。正常ならばわかるはずだった。その証拠に蛭と夜宵は浮いている睦月とは違う方

向に視線をずらして囁き合っていた。

睦月はゆつくりと葵の前へ行き、笑った。

「僕は死んでいないよね？」

葵はその言葉に肯定を示すように頷いた。もちろん、とても言うように。

「眠っているだけだよ。さあ、早く起きよう？」

葵の言葉に驚いたのは浅葱だけだった。十夜達は睦月が死んだ事を知らないのだからもちろんのこと、蛍と夜宵はただ笑っていた。

「賢者は奥で眠っているよ。起こしに行っておいで」

葵は繋いだ手に力を入れ、浅葱を立たせた。そして優しく離し、背中を押した。踏み出す力を与えられた足は自然と動いた。

数歩進んだ浅葱は振り返り、全員に笑って、葵だけに向かって言った。

「空はまだ青いよね、葵」

「夜宵、君が『プラネ科』に行く理由ってやっぱり・・・」

「うん、従者としてというのものもあるけどね。ただ進みたいから進むだけだよ。理由なんてそれだけ」

帰り道、夜宵は冥里に向かって微笑んだ。それを見て並んで歩いていた蛍も穏やかに表情を崩した。同じ従者はお互いの感情が混じる。蛍はそれが心地良くもあり、安心した。

「蛍、あの星って・・・」

蛍は声に気付き、横にいる海里の方に向き直り、そのままの表情で言った。あの星という単語が指すのはただ一つ。二人で見つけた星のことだ。

「ああ、アレ？ 葵からのプレゼントだよ。僕が言った事は半分が合ってる半分はただの希望。まあ当たらずともってところだと思っけど」

「謎かけ？ イマイチよくわからない」

「違うよ。星が降ったのは願いが叶ったからっていうのは本当。それが神の力だからね。でもあの石が海里の夢かはわからない。葵に聞いてみないとね」

納得したように頷く海里を見て蛍はくすつと笑い、夜宵の腕を取った。そして腕を組み、冥里、海里の前へと歩み寄った。

二人はそっくりだった。葵と同じ顔。三つ子と言っているほど似ていた。おまけに服まで同じだった。白で統一された上下。しかし、違和感がある。微かだが、冥里達にはわかる違和感だった。本質は個々で違っている。

「わかってくれてありがとう」

「当然だよ蛍」

答えたのは冥里だった。海里は当然ツとでもいうように腕を組み、不敵に笑っていた。間違えるはずがない。二人にとって見分けることなんて簡単だった。二人には蛍達は顔はそっくりだが、全然違う人物に見えていた。表面で見えるのではなく、内面を見るからわかる真実だった。

蛍は意地の悪い、意味ありげな笑みを浮かべ、冥里の顔の前に人差し指を立てた。

「実は僕達『プラネコ』に行くんだよ。ね、夜宵？」

軽く頷いた夜宵は、冥里に向かってゴメン、と首を傾げた。夜宵は覚醒してから一度蛍に会っていた。その時に進路の話題も出て、夜宵は蛍と同じ進路を進むことにした。

冥里は軽く苦笑し、海里と顔を見合わせた。

「よろしく、海里」

「こちらこそ。奇跡を運ぶ従者のお供として」

「睦月、これからどうする？ 家には戻れないし・・・」

浅葱達はまだ部屋にいた。睦月は自分の体に戻り、しっかりと地面の上に立っていた。生きている証だった。

浅葱が心配したのは睦月が死んだという事実だった。確かに睦月の心臓は止まった。呼吸も止まった。しかし、それは葵によると仮死状態だったらしい。

仮死状態にした理由は簡単だった。賢者は裏で動く仕事もある。賢者は世界の安定を。

「葵の所に行くよ。彼は一人暮らしだからね。あと、夜宵も行くつて言っていたよ。学校から近いから」

睦月は軽く飛ぶように歩いた。これは睦月の癖だった。重力を感じさせない歩き方に浅葱と御影は不安になったが、足が地面に着いて踏み込むのを見て安心した。睦月はここにいる。

「君たち弱すぎ。僕がいなくなったらって面倒なことになって」「同じ賢者に黙って行くからだ」

御影は右手に持っていたカードを投げた。一度十夜に渡したが、十夜、葵の意見で賢者である御影が持っている方が良いというので預かっていた。賢者の睦月にもそれを預かる権利、いや義務がある。いつか使う日まで。そんな日は来ないかもしれないが。

「睦月も使徒だと思っていたから・・・双子だからね。それに御影が賢者だったなんて知らなかったし」

浅葱は明らかに拗ねていた。あの使徒としての面影は無く、今はただの少年として表情豊かに感情を表している。

睦月と御影は目を合わせ、同時に浅葱の肩に腕を回した。
『今はただの人間だから』

「君が神だったなんてね・・・」

「秘密にしてたわけじゃないんだけど・・・ごめん」

大袈裟に溜め息を吐いた十夜に、葵は両手を合わせ、ごめん、と二度呟いた。

それを横目で見た十夜は苦笑し、葵の腕に残っていたゲル状のモノを払った。ゼリーみたいな感触が蘇ると共に、肌の弾力を感じて

不思議な気持ちになった。

これは現実なのか？と。

「あのさ・・・前会った奴も使徒とかなワケ？」

「使徒は一人だよ。プログラムに関わっているのは六人だけ。つまり今日のメンバーだよ。彼は色の司の長。原色を保っていられるのは彼だけだよ。あの時初めて現世会ったんだ。だからあの時わからなかった」

「ふーん・・・あと、星を創ったのって葵の力？」

「僕だけの力じゃないんだけど・・・。無自覚っていうのも怖いね。早く覚醒してくれないかな・・・」

葵は少し脱力して溜め息まじりに言った。

今、葵達がいるのはメインコンピュータの前だった。軽くキーボードを打つ葵の手を見ながら、十夜は言われた言葉を反芻した。

覚醒。

誰の。何が。

その疑問を消すようにぱんっと大きくキーボードを弾いた葵はブラックアウトした画面を背に、にっこりと純粹に笑った。

「空はまだ青いから」

次の瞬間現れたのは画面いっぱいの青空だった。

鮮やかな青はまだ空を覆っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3414d/>

ミッシング・リンク 4

2010年10月8日15時08分発行